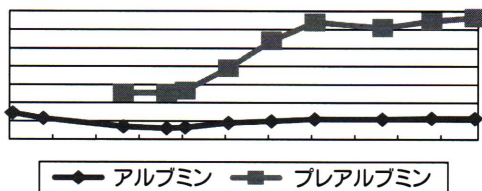


チを選択した。その後、浸出液が少なくなったため挿入して2週間後にドレーンを抜去し、離開が改善したので単品系パウチに変更していった。

〈全身管理〉

糖尿病に関しては内科へ依頼した。血糖は200～400と高値でスライディングスケールを用いてインスリン投与し血糖コントロールを図っていった。また、低栄養に対し、NSTの介入を開始した。食事内容や点滴について検討し、栄養補助食品（アノム、メディエファミノプラス）を加え栄養状態の改善に努めた。



栄養状態の変化について、上の線グラフがプレアルブミン値で、下の線グラフがアルブミン値である。8月4日よりNSTの介入を開始することでプレアルブミン値の上昇がみられ、10月5日頃には離開部に肉芽の盛り上がりが見られた。局所的ケアと栄養管理でストーマ周囲の離開の改善ができた。



IV. 考察

創治癒を遅延させる因子は局所的遷延因子と全身的遷延因子とに大きく分けられる。A氏にとって

の局所的遷延因子とは、ストーマ周囲の離開部に入り込んだ膿汁、浸出液、排便、壊死組織であった。壊死組織に対してデブリードマンを行い、膿汁や浸出液の停滞を防ぐためにドレーンを挿入した。また、二品系パウチを選択することで、皮膚の剥離刺激を軽減し、1日2回洗浄を行い創の清潔を保つことができた。強力な細菌性毒素は健全な肉芽の組織の形成や再上皮の過程を阻害し、またその汚染創から膿汁が排出せず内部に貯留すると膿瘍が形成されることがあると言われている。上記を行ったことは、離開部に停滞した膿汁、浸出液、排便、壊死組織を除去し、創の清浄化を保つことに繋がったと考えられる。

全身的遷延因子としてA氏は、高齢、糖尿病、長期のステロイド療法、栄養障害があげられる。これらの因子により易感染状態であり創治癒を遅延させていた。今回、NST介入により栄養状態の改善ができ、糖尿病に関し内科医へのコンサルトにより血糖コントロールを図ることができた。

V. おわりに

今回の事例を振り、創治癒を促進させるにはまず、患者にとっての全身・局所的遷延因子を明確にし、その遷延因子を解決していくことが必要であった。ストーマ管理とは、ストーマ器具の選択も必要であるが、全身状態を把握し多方面のスタッフと関わっていく必要があることを学んだ。

VI. 参考文献

- 有馬陽一, 術後創傷ケアの基礎知識 消化器外科病棟での特徴. 消外 Nurs 2004; 9(5):474-481
 田村佳奈美, ナースお役立ち 栄養管理のワンポイントレクチャー 栄養スクリーニング(1). 消外 Nurs 2007; 12(2): 170-178.

高齢者への音楽の効果

8-2病棟 松本 亜季子 松本 好乃
 牧田 喜美江 渡邊 昭乃
 増田 由布子 根木 祐子
 朝比奈 睦

I. はじめに

高齢者は、入院という新しい環境へのストレスや外界からの刺激の減少により見当識障害や不穏症状が生じ、昼夜逆転となる事が多い。そのため日中の

刺激を高め、生活リズムを整えるため、音楽と軽体操「遊び+リハビリ」(以下、遊びり)を取り入れ、実施した。1か月間実施し高齢者への音楽の効果が分かったためここに報告する。

II. 研究方法

1. 研究期間：H19.10～10.31
2. 対象：70歳以上の認知症混合部屋の女性 7名
3. 方法：平日14時～14時30分の30分間で、音楽をかけて軽い運動を促す。実施前後に評価表を用いて評価を行う。
4. 倫理的配慮：対象者と家族に、参加は自由であり、参加しなくても治療や看護を受ける上で不利にはならないことを書面で説明する。

III. 結果、考察

遊びりによって、殆どの参加者は表情が豊かになり言動が増した。しかし、音楽を知らないと反応が低く、対象者の生き生きとした反応を引き出すためには、個々の馴染みの音楽を知ることが必要であると分かった。また、スタッフが付き添ってられず音楽だけを流した場合、対象者の反応は低く、音楽が子守唄代わりとなってしまう、対象者が眠ってしまうこともあった。スタッフが対象者の目と目をみてスキンシップを図った時は、対象者の反応はよく

遊びり後の活動性も高まった。また、個々の認知症のレベルや活動レベル、術後の経過日数の違いにより反応に差が生じた。

今回の目的であった昼夜逆転の減少に対しては、音楽によって過去の記憶が呼び覚まされ、軽い体操を行うことにより、適度な刺激と疲労が夜間の心地よい睡眠を促す効果があったと考えられる。また、遊びりの参加によって、対象者の笑顔が増えたことから、入院生活中の精神面での生活の質の向上が図れたと考える。そして、幸福感を得ることで情緒的にも安定し、不穏への効果もあったと考えられる。

IV. まとめ

1. 馴染みの曲は脳を刺激し、感情を引き出す。
2. 馴染みの音楽を聴き、歌うことで活動が増す。
3. 音楽を通して幸福感を得ることができる。
4. 積極的な発語が増えた。
5. 表情が増えた。

ベッド上で行う足浴用具の検討

～患者さんの使用調査結果を含めて～

8-2病棟 檜原 悠太 松永 美代
渡辺 暁子 堀江 真里
池ヶ谷 愛 片平 歩
中島 藍子

I. 研究の目的

私たちは、看護師が効率的に行え、かつ患者負担が少ない足浴器具の開発を検討し、その結果、足浴器具（以下そくよ君）を開発した。今回は患者さんに足浴を実施し足の負担・洗いやすさの検討をした。

II. 研究の方法

研究期間は平成18年4月～平成19年12月。方法はそくよ君使用后、5段階評価でのアンケートを実施した。

III. 研究の結果

患者アンケートの結果「足を洗っている間の安定感」平均値3.8点、「足を洗ってみての気持ちよさ」平均値4点 だった。

その他患者の意見として

「足がお湯にたくさん浸かり気持ちがいい」「三角枕があるので安楽な体位が取り易い」「排便の際、

足を上げなくてよいので楽」などの意見が出た。看護師の意見は「足の出し入れの手間が少ない」「足がゆったり入るので三角まくらの位置を調節しながら洗うことができた」「三角枕を活用することで、仰臥位をとれない患者でも側臥位で実施することができる」「容器のカットの部分からお湯がこぼれそうになる」などの意見が出た。

IV. 考察

そくよ君の使用時には三角枕を使用することにより下腿・足底がバケツの面に接し、下肢の安定感が得られる。また不要な緊張を和らげ、腹筋・背筋もリラックスした状態で実施することができるとわかった。今回の研究からそくよ君は膝が90度屈曲できないと使用できないという難点が発見できた。このような難点に対しては、枕の高さ・位置を調整しベーンを使用することで足浴を実施することができる。